

守島良安 正徳二年（一七一二）

「前略



△思ふに、地獄はどこにあるか、その存在は分らない。字義からみて他の部に入れたが、

こどめた。

獄といふのは、みな高山の頂きが常に
る処で、温泉がつねに湧き出ている。

豊後〔鶴見〕 肥前〔阿蘇〕

信濃〔浅間〕 出羽〔羽黒〕

越の〔白山〕 伊豆〔箱根〕

などで、この山頂は^{くわくわ}風^{くわくわ}と燃え立ち、

さ出で、さながら焦熱修羅のありさま

豆後（速見郡野田村）に赤江地獄とい

示丈四方に真赤な湯が血のように流れ

が、まだ冷えきつてない処にも魚がい

遊んでいる。また、一つの不思議であ

上の池広き方六間
へりわき出づ。見
さかいて大いに
頓やがて身はただ

切泉之穴しほり郡ノ西北
カクシテ泥土ひぢ有

し。

内坊地獄とて熱
池の広さ方六間

ツ。其湧上事皆三
元村の事日本紀景

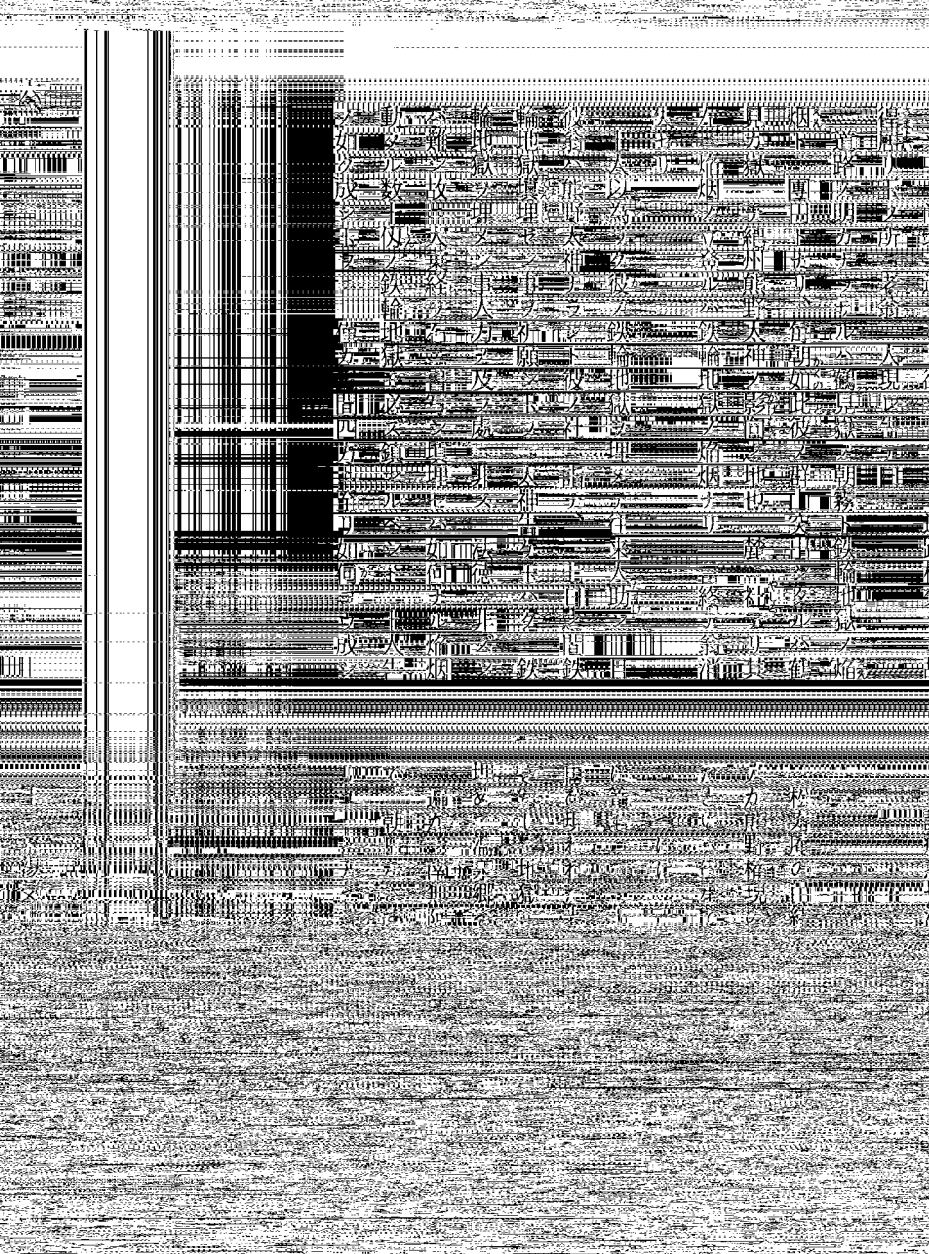
外 郡ノ西ニアリ
巧こえをあげてまげばニ発声大言 驚
内 云々

こけの御名を唱ふるのみぞ力くさは
さらなり、三十一もじにも意あま
の詩もて思ひをのぶる。

れがすきずき。海じごくにも魚の住
も同じ六ツの衝ぞ、ただたのむなり
にはおもき精進日なれば、仏前に念
つく。」

水之江、通称は弥五郎といい、豊前
村の庄屋であった。父の跡を継いで
とする俳人で、『温泉めぐり』は弘
泉に遊んだときの紀行文である。

湯瀧は鉄輪温泉松寿庵（現永福
地獄原のありさま、噴煙・轟音など
。『三才図会』は血の池に棲む魚を
では海地獄に棲む魚をあげている。



ニ祈願アリシカ

レ法徳ノ然ラシ

楽ト成レル者ナ

ラ休ムノミナラ

開闢之元因ナリ

有様で、一遍上

(蒸湯)を開い

めに、鶴見権現

た。満願の日に

を一字一石に書

る鉄輪大地獄を

「熱の湯」は、

書いて埋めたの

で、一名「ウカ

記』を世に出した。

の旅人も増えて地獄を訪れる人も多く
地獄蒸むじ」は実用的で来訪者にはめずら
思われる。

、『七湯廻記』で紹介されている地獄
蒸菓子」の製法である。

法

然薯類を用 照湯より一里西のかた天
の自然薯を最上とす

前国下座郡蟻城に産する極上白砂糖を
ゆ

分に合あわする也 自然薯よろしきの皮を
め 摺鉢すりばちにて能くすり 夫それに他二品を
摺りませ 夫それより井籠いごにを芎さな入れて布
て舗しきならし 其中に右の三品調合のも
上の面をよくならし わくの上に竹
の餘りにて四方より包むべし ふきぬ

は別の布巾を添て句とへし
 の蓋を覆ひ地獄の土に井籠を据へ
 其上
 きを水にひたし復ひ火文井籠にまく廻
 へし斯して緑香本立ほど蒸して取お
 と布巾をゆめて放しおちふほどは切
 冊下寸五分五厘方の短に懸日百九拾日
 くだく蒸たる所の如百じき事は、奥の格
 ぼくには負さぬ誠に其色真白にして
 怪くして無類に負

大開 当国政以部人絹の寒製を最しと

此懸日寸百六拾日有

筑前下座郡蟬城に産する赤砂糖

を最しとす

右の
 つつ
 の物を
 の格
 しくよ
 はし蒸
 通り
 シ蓋を
 に懸菓
 たにか
 それ
 中の
 口と
 へあわ
 品に移
 には附
 夫を

御用捨)されるように願出ているのである。

六年三未月

御田地山田鍛冶給 地獄地続にてご座候処 去秋
地獄火勢段々増長つかまつ仕り 右御田地一面に火氣あい
所々に吹出し候て 田根付け出来仕るべき義ご座
候間 お慈悲を以って 当年より地獄荒御用捨仰まご
けられ下さるべく願上げ奉り候 作毛出来しゅうたいの節に
成り候はば早々前々通り御上納仕るべく候 此の
しく願ひ奉り候 以上

れの「出湯崩引地」も「地獄荒引地」も起返りは
ど不可能であつたらう。このような無年貢地は別
地帯の農業の特色であらう。

や温泉の存在は現在の別府にとっては貴重な観光
あるが、農業に支えられた封建社会の農民にとつ
感そのものであつたのである。

は、温泉・温泉風俗について述べることにする。